

知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】平成28年10月12日（水）

午後1時30分～3時30分

【会場】菊川文化会館アエル 小ホール

1 出席者

- ・ 発言者 菊川市及び御前崎市において様々な分野で活躍中の方
6名（男性3名、女性3名）
- ・ 傍聴者 170人

2 発言意見

番号	分野・所属	項目	頁
発言者1	自然環境	棚田保全活動を通じたまちづくり	1
2	防災	命を守る、命をつなぐ災害ボランティア	4
3	福祉	高齢者と地域の架け橋を目指して	10
4	地域活動	医療従事者が働きやすいまちづくり	12
5	農業	静岡ブランドの魅力向上	19
6	農業	静岡農業の新たなチャレンジ	19
傍聴者1	—	お茶のある日本食文化	33
2	—	遊びと茶文化の融合	35

【川勝知事】

今日はようやく、この菊川並びに御前崎の市民の方たちからさまざまな御意見をお聞きして県政に生かしていくというこの広聴会を開くことができまして、大変喜んでおります。

これは、私が県政について御説明をするという会ではございません。菊川並びに御前崎の市民の代表の方々からそれぞれ御意見を賜り、それを県政に生かしていくという場であります。しからば、これをお聞きして、聞き流して終えていくかということ、そうではありません。中には厳しい御注文があったり、御要請があったり、御批判があったりいたします。おっしゃっていることに対しまして、今日この場でお答えできないものがありましたら、ホームページなどを通してすべてのことについて真正面からお答えすると、こういうシステムになっております。

そうしたことで、今日は時間があれば皆様方のフロアーからも多分お聞きする時間ができるのではないかと存じますけれども、ともかくこの代表の方たちの意見をしっかりと承って県政に生かしていくと、こういう姿勢で臨んでおりますので、長時間ではございますけれども、何とぞよろしくお願いを申し上げます。

【発言者1】

私たちのNPO法人せんがまち棚田倶楽部、菊川市の上倉沢というところ、千框の棚田、ここの保全活動をしているNPO法人でございます。NPO法人のほとんどのメンバーはお茶の農家、私も含めてですけれども、お茶の農家でありまして、それを手伝ってくださっているボランティアの皆さん、そして学生たち、いろんな方たちに手伝っていただきながら、何とか保全活動をしております。

私ですが、実は8日から雨の中2日間、そして昨日、一昨日と4日連続で稲刈りをしまして、こうして座っているのもきついくらい筋肉痛で、もう本当にきついです。千框の棚田、今現在3ヘクタールちょっとを何とか復田をしてきたんですけれども、実はほとんどが手の作業なんですね。今、千框の棚田に行きますと、見事に「はぜ掛け」したきれいな景観が見られる、そんな棚田でござ

ざいます。

この千榎の棚田、実は歴史は随分古くて、400年以上前、戦国時代末期、私たちの先祖が倉沢に住み着いたころから、徐々に棚田をおこし始め、そして江戸時代中期には既にもう3,000枚を超える見事な景観が広がっていた、そんな棚田でございます。

その棚田も減反政策、そして後継者不足からほとんどの棚田が消滅しました。平成6年に現理事長が口火を切りまして、何とかこの棚田を復田したいということから私たちの活動は始まりました。平成6年からですので、もう既に22年。そして平成22年からはいよいよ棚田が少しずつ復田してきた、そろそろ人手不足だということで法人化、NPO法人せんがまち棚田倶楽部ということで活動を始めました。

この活動を始めるきっかけというのは、やっぱり徐々に棚田が増えてきて、人手も欲しくなる。ということは、資金面でも非常にボランティアだけでは苦しくなるというところで、法人化をして、棚田のオーナー制度を始めようということから、棚田のオーナー制度を始めたんですけれども、やっぱり最初は50組を予定していたんですが、なかなか集めるのが大変でした。現在、もう50組は優に集まるんですけれども、それを地元だけでやっていくというのは非常に難しいんですね。今年も田植え、稲刈りには600人前後の方が集まります。それもほとんどが田植えも稲刈りもしたことがない方が多いです。そういう中で地元の農家のメンバーだけでやっていくというのは、非常に難しい。

そこで私たち法人化をするときに考えたのは、若い力を取り入れようということで、一番最初に静岡大学に行きました。静岡大学の大学側にことわりを入れまして、学食に「棚田の保全活動をお手伝いしてくれる方いませんか」ということで募集をしました。そのときに3人見つかったんですね。3人の学生が釣れました。そこから今平成28年で、既にもう7年目になりますけれども、今現在30人を超える団体になりました。静岡大学棚田研究会、この学生たちの力が今非常に私たちにとっては大きな支えになっています。

私たち一番最初平成6年に活動を始めたころは、30代、40代の、もう本当に意気盛んな農家の青壮年でした。ところが今は、私かろうじて50代ですが、ほとんどのメンバーは60代を超え、もう70代になっている方もいます。そうい

った中で保全活動、ましてや手で植え、手で刈る、そんな棚田の保全活動をしていくというのは非常に大変なんですね。

そこで学生たちが徐々に増えてきて、今では重要な、本当に私たちの戦力の1つになっています。学生たちは私たちの代わりに、もちろん田植え、稲刈りもやるんですけども、全国、静岡県内が多いですけども、東京、神奈川、名古屋あたりからオーナーさんも集まります。そういった皆さんを手取り足取り、田植えの仕方、そして稲刈りの仕方も一生懸命教えてくれるんですね。インストラクターということで、一生懸命私たちのサポートをしてくれています。

そして棚田は保全活動だけではないんですね。保全活動だけで棚田を有名にしようなんて思っていません。棚田にはこれからまだまだやりたいことがたくさんあります。既に3ヘクタールは復田をしましたが、あと6ヘクタール以上の昔棚田だった場所があります。ここを何とかしたい、そういう夢があるわけです。その中ではやっぱり資金不足というのも非常に大きな問題になってきます。

そういった中で千框の棚田をとにかくPRしたい。そんな中で考えついたのが、あぜ道アートだったり、お月見コンサートだったり、そういったイベントもたくさんやるわけです。イベントをやる、その中で私たち地元の農家を中心になってやっていくというのは非常に難しいわけです。でも、そこを学生たちはやっぱり企画力があります。とにかく実行力が素晴らしいですね。さすが静岡大学、国立大学ですので、いろんな子たちがいます。その中ではもうポスターづくりとか、とにかく私たちにはとてもできないような、農家のおじさんにはとてもできない、そんなことをしっかり学生たちがやってくれるんですね。

学生たちは静岡から毎回レンタカーを借りて千框の棚田にやってきます。この学生たちはレンタカーを借りるということは、当然お金がかかりますので、この交通費だけはNPOで出しています。あとは全くボランティアで一生懸命活動してくれます。夏場の草刈り、本当に暑い中を一生懸命やって、地元の農家も、午後になったら無理だよ、俺はもう勘弁してくれよと言って、午後は出てこないメンバーもぼちぼち出てきました。そんな中で学生たちは一生懸命夕方まで、日が暮れるまで草刈りをしてくれたり、そんな心強い味方がたくさんいるというのが今の千框の棚田です。

ところが、いろいろNPO法人化して、地元の農家以外の方も今はNPOに徐々に入ってきています。元高校の生物の先生だったりとか、あとは静岡大学のOBで、今は県内に就職していたりするそんな方たちも入ってきました。そういった中で、今現在私たちが拠点にしているのは上倉沢公会堂を拠点として動いているんですけれども、オーナーさんたち、500人、600人が集まる、そういった皆さんに対応できるような施設というのが、これからは必要になってくる。またこれから将来考えたときに、NPOとしては徐々にこの倉沢に住んでいる人以外の方が増えてくる。そういった中で自治会で運営している公会堂を使っていくのは非常に難しい。

今日は本当に県知事さんもいらっしゃいます。できたら、こういうハードの面の御協力もお願いをして、大体お時間になったようですね。それでは終わらせていただきます。

【発言者2】

NPO法人御前崎災害支援ネットワークの発言者2でございます。私たちの団体は、まず私がファイナンシャルプランナーとして新潟県の中越地震が起きたときに、いろいろ小千谷市だとか長岡市とか調査に行ったわけですね。お金の調査で行きました。その結果、小千谷総合病院や小千谷の対策本部の方でお話を聞いて、まず命を守ることが難しい、命をつなぐことも難しい、お金のことも大事だけれども、そういったことを教えられました。

そこで自分自身、防災士の勉強をしたり、災害ボランティアの多くの勉強をさせていただきましたけれども、当時、東海地震が来るはずの静岡県または御前崎市って、みんなどういふふうには災害に準備しているんだろうかということで、少し商工会の女性部をやっているときに聞かせていただきました。そのときは水1本準備している人はいませんでした。

命を守る、命をつなぐということの啓蒙活動をする必要があるのではないかとということで、仲間を募りまして、平成19年に御前崎災害支援ネットワークを発足しました。小千谷市で聞いた話で、小千谷市の災害対策本部を立ち上げたのは1時間後だった。なぜ1時間もたってしまったかということ、土曜日の午後5時56分に発生して、職員は市外に出ていた、または職員自体が被災していた

ということを知りました。

本当に責任者である人たちがいなくて、数人のわずかな人数で災害対策本部を立ち上げたということを知りまして、私はそういえば「災害が起きたら何となく行政が何とかしてくれるんじゃないかな」と自分もそう思っていましたし、未だに多分県民や市民の方はそう思っていると思うんですけども、いや、そうじゃないんだよなということを知られました。

私たちの団体でしっかり目的を決めて活動しようということになったわけですけども、それが「災害時に行政に頼らない市民による自助・共助・協働を推進しよう」ということを目的に決めました。

災害ボランティアとしてさまざまな被災地へ私たちは足を運ばせていただいていますけれども、避難所やいろんなところで話を聞いたり、また東日本大震災では岩手県の大槌町へ何度も行っているうちに、なお一層自分たちで何とかしなきゃいけない、行政に頼ってはいけないということを知りました。

今現在、私たちは命を守る、生き延びるために災害のいろんな活動をさせていただいていますけれども、災害が起きたときの避難所の運営についても、行政が運営するのではなくて、被災者本人たちが運営していかないとダメだよということで、御前崎市の自主防災組織に毎年避難所運営研修会を2日間かけて実施していますけれども、それももう今年で8年目になりました。

自主防災組織は、どうしても男性が中心になってしまっていて、若い方もいない。もちろん防災委員の方もいらっしゃいますけれども、主に責任者となる方たちというのは年齢層が高い方です。

大変申しわけないんですが、現在の自主防災組織の役員の年齢層が非常に高いものだから、ちょっと皆さんにお聞きしますけれども、会場の皆さん、自分のパンツは自分で買う人、手を挙げていただけますか。ここで約半分弱ですね。

まだ若い方もたくさんいらっしゃるんですが、これは自主防災組織の講演会に呼んでいただくことが多いんですけども、大体1割から2割程度しか自分のパンツを自分で買ったことがないという人が多いんです。そういう方たちと食事をつくるのに際しても、台所男入らずというようなそういうようなことがありまして、そういう方たちが、いざ災害が起きて避難所の運営をしなければ

ならないということに非常に問題を感じております。

女性や子供の性を含む暴力というのも散見されていまして、相談するところも自主防災会しかないというような状況になっています。

せっかく命が守れたのに、関連死という形でその命を落としてしまう人もたくさんいます。その関連死を少しでも減らしたいということで、女性にその自主防災組織で活躍していただく、または職場や学校や家族の中、家庭の中でリーダーとして活動していただくということで、私たちは平成 25 年から女性のための防災・減災リーダー養成講座というものを 2 日間かけて、立派な講師の先生をお呼びして開催しておりますけれども、県内で延べ 247 名が受講いたしまして、リーダーとなった方が 174 名おります。

今、少しずつ地元の自主防災会やさまざまところでリーダーとして活躍していただいておりますけれども、なかなか地震だけではなくて、いろんな災害のときに避難所も開設されますので、とにかく命を守る、命をつなぐ、共助・協働を推進できる活動や、女性の防災・減災リーダーの養成を一生懸命活動の目的としてやっていきたいなというふうに思っています。

関連死の原因ともなっている災害時の避難所の生活だけではなくて、生活再建に必要なお金の問題や法的な問題を、今私たち新たに取り組もうとしているわけですが、静岡県弁護士会ニュースというホームページを見ていただくと、災害時にこういったことはこういう窓口相談するといいですよとか、いろんなことが書いてありますけれども、その市町編をつくるような形で、その広報をしていきたいなというふうに思っています。

ただ、このような活動をするには行政の方の御協力が非常に重要になってまいります。おかげさまで御前崎市では何かをやるにつれ、会場であるとか、皆無料で貸していただけるようになりましたけれども、他の市町でもこういった活動を進めているところもございます。行政の方のより一層の協力と、助成金だけでは足りない、私たちはボランティアでいろんなことをさせていただいているんですが、やはり講師の先生をお呼びするとかしたときには、助成金だけではちょっと足りない部分がありますので、是非その辺の御協力もいただけるとありがたいなと思います。

南海トラフの巨大地震に備えることができ、災害時に行政に頼らない自

助・共助・協働を推進するには、やはりこういった協力をしていただけるとありがたいなというふうに思っておりますので、是非よろしく願いいたします。

【川勝知事】

それぞれ菊川と、それから御前崎のトップバッターとして、ここは文化会館アエルというところですが、いい人に会っているなという気分であります。

発言者1さんは有名といいますか、よく知られた、この棚田のリーダーでございしますが、本業はお茶で、そこから棚田に軸芯を移されて3ヘクタールを元に戻された。しかも、この千榎は400年の歴史を持つということで、この土地への愛着と、この先人が苦勞してつくったものをもう一度復活させようという使命感でお仲間とともに、このせんがまち棚田倶楽部を立ち上げられまして、今、静大の学生さんが棚田研究会を立ち上げるころまで、言ってみれば場所を提供せられて、その青年たちが今度はあちらこちらから来られている棚田オーナーの方たちに対して、いろいろと研究されているわけなので、教えることができるというそういうところまで持ってこられたわけですね。本当に御立派だと思います。

私が行ったときだったと思いますが、あぜ道なんか棚田全体を楽しむためのイベントの準備もされていたのを思い出しますが、ここまでされて、さらにあと6ヘクタール、全体で10ヘクタールぐらいまでやりたいということですね。どのぐらいの大きさかという、高校1つが大体4ヘクタールぐらいの大きさです。だから今までに大体高校1つ分くらい元に戻されたということで、高校1つ分のところに、段々になっているわけですから、そこを1つ1つ丁寧に棚田を元に戻していくというのは、手作業だといかに大変かというふうに想像に難くないというところでもあります。

静岡県全体で耕作放棄地が1万2,000ヘクタール、そのうちもうどうしようもないのが6,000ヘクタールぐらいありますから、6,000ヘクタールぐらいを元に戻そうということでやっているんですが、この6年間余りで3,000ヘクタール戻しました。しかし、その傍らで3,000ヘクタール耕作放棄地が出ているんです。ですから、このまま放っておくと本当に駄目になりますので、ですから立ち上がらないといけないんですね。そして、その1つが棚田だ。

棚田というのは非常に難しいところです。しかし、手入れしてあるので、ちょっと離れて見るときれいなわけですね。「田毎の月」という句もございませうけれども、1つ1つの田に月が映っている、その美しさを愛でたものでありますけれども、見て美しい。ですからこれは言ってみれば芸術なんですね。結果的には美しい芸術としてきれいだと。しかも、実になるということで、各地にオーナー制度というのが導入されて、棚田百選だとか、棚田を復活させる運動が全国各地にみなぎっているわけですが、その菊川市における代表が発言者1さんの棚田倶楽部なわけですね。

あと6ヘクタールとおっしゃっていますが、何とかこれは我々も耕作放棄地になって、かつて耕作されたところをもう一度戻そうということにつきまして、しゃかりきでやっているところがございます。

また、学生さんが来ても、恐らくこちら菊川はお茶でしょう。深蒸茶というのは菊川だ、掛川じゃないんだということですよ。ちょっと宣伝の文句では向こうの方が勝っているようではありますが、とにかく掛川に来て、菊川が本当は原産地だということもございまして、要するにレベルが高い。その菊川も掛川も牧之原も島田も、それから川根本町も茶草場で世界農業遺産ですから世界の宝物なんですね。そういうふうになっているレベルの高い方々が今ここで棚田に視点を当てて、先ほどおもしろかったのは、静岡大学を卒業したOBも来てくれているということなんですね。世代を回しているという形になっているわけなんですよ。

ですから、残りの6ヘクタールを一気にというわけにはいかないと思いますけれども、静大の農学部もございまして、そうしたところを地域一体でここをモデルケースにしてどういうふうなことができるかということで、ただしこれはやはりやっていращやるこの棚田倶楽部の主体性というものを損ねるようなことがあってはいけないと思いますけれども、そこと相談しながら、全体としてこの千框の棚田が元に戻るという日を一緒にお祝いをしたいと思う次第であります。

それから発言者2さん、お金から人へ変わったということですね。ファイナンスプランナーとして中越地震で小千谷に行かれたと。そこでお金どころではない、もっと大切な命の問題に気づかれて、そこで果たしてうちではどう

かということで、何ととっても御前崎ですから、もしものことがあればもしもの大事になるので、どうしたらいいか。

実は消防隊員も、自主防災組織も、さまざまところで男中心です。仮に消防をとりますれば2万人ぐらいいるんですよ、消防隊員さんが。そのうち300人です、女の人たちは。ですからもう本当に一握りで、それは男の世界だから入れないというそういう雰囲気もある。しかし、男でできることは女にできないわけじゃないということも言ってもしょうがないですが、役割を上手に変えると、なるほどいざというときに重たいホースを持ってやるときに、女手じゃ頼りない面もありますが、実際は今消防で全国大会がありますが、静岡県、時に一等賞とか二等賞、女性隊が取って帰ってきますよ。ですから消防においてそう。

それから避難所における避難所の運営ですね。避難所に避難してくるのは、男も女も老若男女、皆来ますから、そのときに乳飲み子を抱えているお母さんが来ると、子供が泣く、そうするとほかの人に迷惑だと。その人のことを考えているかということ、なかなか男だけで運営しているとそのことが分からないわけです。

ですから、実は女性が入らないとだめなんですよ、半分は女性なので。ですから、自主防災組織が男性中心であるとすれば、これは意識を変えて、御前崎や、あるいは菊川から女性がどんどん進出してこられて、さまざまな女性的な知恵を入れながら、いざというときに避難所の運営も男女協働でできる、こうしたことは実際に訓練などをやってみないと分かりません。

そして、またやはり防災士というのはそれなりの訓練を経たり、あるいは知識を持ったり、技術を身につけないとなれませんので、そのために静岡県はさまざまな静岡県独自の防災士育成のプログラムを持っておりましても、そういうものはありますが、そこに女性の方たちがどんどん参加して下さるのがいい。

二百数十名来られて、そのうち170名ぐらいがリーダーになられたということですが、そういうリーダーの中で実際に回せれば、外から呼んでこなくても、自分たちのところで若い女性隊員だとか、女性の防災組織に入った新米の方たちを鍛えることができます。

だから自分のところで回るようになると一番理想なんですけど、最初はなかなかそうもいかないところがあって、私は自主防災組織もそうですし、危機管理、市とか町の危機管理もそうですし、消防隊もそうですし、こうしたところに女性の力を入れていかないと、いざというときに、結果的には男の人も自分のパートナー、あるいは娘、あるいはお母さん、そこがえらいことになるということで、女性的な価値を入れないとまらない時期に来ているということですね。

こういうのは、実はモデルケースです。発言者2さんの場合は、もう明らかにモデルケースですね。志がいいですよ。お金から人、人から人の命、それから女性というところに来て、実際にそういう活動をして、もう1年や2年じゃありませんから、もう10年近くやられている。あるいは10年以上でしょうかね、やられているわけでありまして。もちろん発言者1さんの場合も同じです。ただやっぱり年齢を重ねてきますから、若い人につないでいかないといけないので、そのところは一番重要な問題ですね。人材育成くらい重要な問題はないと思います。その面におきまして、我々もいろいろと学ぶ形で御協力できることがあるならしていきたいというふうに思った次第でございます。

【発言者3】

菊川市高齢者総合相談支援センター和松会の発言者3と申します。私が担当している相談支援センターは、菊川市の小笠地域にある菊川市家庭医療センターの中にあります。この窓口ができる以前の菊川市は、市直営の地域包括支援センターがプラザけやき内に1カ所しかありませんでした。そのため旧小笠町の方は、プラザけやきまで相談をするときには足を運ばなければいけない状況にありました。

そこで、菊川市から旧小笠地域にも相談支援センターをつくりたいということで、和松会の方に依頼がありまして、地域包括支援センターの支所という形で、平成23年から窓口を開設いたしました。高齢者の何でも相談窓口として、来所・電話・訪問による相談を受けております。現在では大分地域の方に認知されるようになってまいりました。

私自身ですけれども、昔からボランティア活動に興味がありまして、中学生のころから地域にあるボランティアサークルに所属し、障害のある子供たちが

おもちゃで遊んだり、友達と交流できるおもちゃ図書館のお手伝いや、障害のある子供たちと高校生が交流するワークキャンプへ参加したり、サマーショートボランティアでは保育園や特別養護老人ホームへのボランティアにも行かせていただきました。そんな私の姿を見てきた高校の担任に勧められて介護の勉強をすることになり、就職先にも福祉という道を選び、社会福祉法人和松会に就職いたしました。

介護福祉士を取得していたことから、介護現場では何年か経験を積んできましたが、相談員としての経験はほとんどないような状況でした。しかし、和松会が地域包括センター「ブランチ」の委託を受けることから、法人からの辞令を受けて、私は窓口を担当することになりました。

初めは小笠地域の相談を受けて地域包括支援センターにつなぐだけと聞き、それならば自分にもできるかもしれないと思い、状況確認や相談を受けるために訪問をしました。ところが、地域には認知症高齢者の独居、高齢者夫婦のみでの生活、ごみ屋敷での生活、主な介護が夫や妻といった老々介護、単につながることではない現実がそこにはありました。

しかし、窓口は開設されたばかりで、事務所内も私一人、自分の相談相手が目の前にいない現実、日々どうしていいかわからないような状況でした。そんな相談員としてのノウハウも知識もない自分にできることを自分なりに考えた結果、私にできることは話を聞くことでした。それからは窓口に来られない方のために、とにかく地域に出て、足を運んで、訪問時間を長めに取り、話をゆっくり聞くことを相談員として行ってきました。

開設当初は、窓口が周知されていないこともありまして、時間をかけてゆっくり話を聞くことができました。そんな中で、高齢者、家族はもちろんのこと、認知症の方とも関係づくりができていくと実感できることが多くなってまいりました。次第に「聞いてくれてうれしかったよ」「話してスッキリしたよ、ありがとう」「あなたに相談してよかった」という言葉をいただけるようになり、必ずどこかにつなげなければいけない、何かをしなくてはいけないと思っていた当初の自分の考えはなくなり、むしろ話を聞くことから必要な支援が見えてきたり、必要なサービスや事業を紹介できたりすることに気がつきました。

話をしっかり聞くことは誰にでもできることかもしれませんが、そこから得

られた情報から何が必要なのか、どこにつなげればよいのか、いい生活ができるのかということを支援していくことは、相談員だからこそできることだと思いますし、とてもやりがいのある仕事だと気づきました。

さらに、相談員になって気づいたことがあります。民生委員さんや地域住民の方の重要性です。相談員は事業所で勤務している間は支援することが可能です。しかし、高齢者にとっての困りごとや支援が必要なときというのは、決まった時間や曜日はありません。そんなときに御協力いただいたのが民生委員や近隣の住民の方です。週末の見守りや声かけによる異変の気づき、常に関わりがあるからこそ気づくことができる変化等、今までも多くの方に御協力をいただき、やってくることができたと思います。

これからも地域の方との出会いを大切に、さまざまな問題について一緒に考えていきたいと思っています。また支援に必要な知識や新しい情報をどんどん身につけていき、「困ったことがあったらあそこに相談しよう」と言っていたような窓口の相談員になれるよう、毎日頑張っています。これからもどんなことでも気軽に相談できるような窓口を目指していきたいと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。

【発言者4】

御前崎市地域医療を育む会の発言者4です。最初に、私たちの会を簡単に報告させていただきたいと思いますが、平成25年の4月に設立しまして、ちょうど今3年半となっております。現在の会員数は283名です。

それで活動ですけれども、この地域のお医者さん、それから看護師さんが大変少ない中で御苦労されていて、働きやすい、それから働きがいのあるまちにしようということで、いろんな機会を通じまして、御前崎市の医療の事情とか、上手なお医者さんのかかり方、そういうものをPRしたり、それから病院と市民とのパイプ役になるために、病院の職員と接する機会を多くして、積極的に参加をしたり、それから市民から感謝の言葉を募集しまして、それを医療関係者にお伝えするという活動をしております。

去年の4月の総会のときに、出席していただいた市立御前崎総合病院の院長先生にサプライズで、先生宛ての感謝の言葉を表彰状みたいな形にしてお渡し

したところ、大変喜んでいただきまして、この活動をやっている間違いないんだというふうに思いまして、大変嬉しく思いました。

また、こういう医療ストックの少ない中で、将来を担う高校生に地域医療に関心を持っていただくということで、今日お見えの西部保健所の皆さんとか、それから浜松医大、この中東遠地域にはすべての市町に地域医療を支援する団体がありまして、そういう輪も広がっておりまして、回り回ってシンポジウムを開催しております。そのシンポジウムに高校生を募集して、スタッフとしてお手伝いをさせていただいております。

この近くでは菊川市に菊川市地域医療を守る会があります。掛川市にはf.a.n地域医療を育む会がございます。この2つともすごく立派な活動をしておりまして、この2つの会とうちの会、3つで共同して今度の11月6日に地元の高校生を対象にした病院見学会、医療体験講座を開催します。大変ありがたいことに、地元の池新田高校から3名の高校生が応募していただいております。地元の方が地域医療に関心を持っていただいているということを実にありがたく思っております。

もう1つの目的として、私たちはいつも健康で元気に生活できるということで、お医者さんにもかからないよう、介護にならないように、そういう勉強会を開催しております。講師には市内の薬剤師さん、それから歯科衛生士さん、それからお医者さん、それから保健師さんに看護師さん、そういう地元の方に講師をお願いして、皆さんにPRしておりますけれども、これもまたお互いに顔の見える関係になって、本当に良かったなと思っております。

私がこの会を設立させてもらった経緯を報告させていただきたいと思うんですけども、私が市立御前崎総合病院に勤務していた平成16年ですが、10年ちょっと前になりますが、病院の先生がどんどん減って半減してしまいました。そのとき病院はどうしたかという、隣の町の病院へかかってもらったり、市内の開業医の先生のところへ行ってもらったり、そういうことを繰り返していましたが、元々御前崎市には開業医の先生が少なく、それでなおかつ高齢化された先生も結構いまして、これから先どんなふうになっちゃうのかなという住民としての不安、それから不満もありました。

私もこのままでいくと御前崎市から医師がいなくなっちゃうんじゃないかと

いうふうに思ったときもありました。その一方で、市立御前崎総合病院のスタッフの人たちは、本当に寝る間も食べる間も惜しんで、皆さんの健康管理をやっていたことが、すごく印象に残っておりました。

私が退職した後少しして、袋井市で地域医療を育むシンポジウムがありまして、全国のある地域の何カ所かでこういう地域医療を育む活動をやっているということを聞きまして、あるところでは医師が増えたよというそういうような事例も聞きました。

元々人前で話すこととか人をまとめることはなかなか苦手な私ですけれども、市民の人たちが本当に困って、不安で、それからどうしようかというふうなそういう時期に何もしないで、活動しないでということだと、全然動かなかつたら、後々後悔するのではないかと思ひまして、皆さんの協力をいただいて会を立ち上げることができまして、今本当に活動してきて良かったなと思っております。これも本当に関係の皆様のお協力あってこそだと思ひます。これからも皆さんの協力をいただいて頑張っていきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

【川勝知事】

今回は菊川の発言者3さんと御前崎の発言者4さん、福祉と医療に関わるお話をいただきまして、発言者3さんの抱えていらっしゃる問題というのは、日本全体の問題と言ってもいいと思ひますけれども、共通の問題ですね。高齢者をどのように支援していくかというこういう問題があります。だんだん、だんだんと高齢者が人口割合の中で増えていきますので、この問題は極めて重要であります。

そうした中で、小さいときから人を助けるといいますか、優しい気持ちをお持ちで、その出発点が高校の先生があなたはそういうボランティア活動などに向いているので、福祉の仕事に関わる勉強をした方がいいということで、ちゃんと資格も取られて、それで高齢者の支援に関わる仕事につかれ、今はその「ランチ」といいますか、人の話をお聞きすることを通して、高齢者の独居老人だとか、認知症になりかけている方たちのお話を聞くことを通して、実はこの仕事が前に進むという大事なことに気づかれたということですよ。

実は、静岡県は健康寿命が世界一です。世界の中で一番健康寿命、すなわち高齢者になっても日常生活に支障を来さない寿命、これを健康寿命といたしまして、平均寿命と区別されます。平均寿命は、寝たきりの老人の方も、いろんな人を含みますけれども、健康寿命というのは、皆さんのように日常生活に全く支障のない方を言うわけです。それは日本が世界一です。その中で静岡県民がトップなわけですね。

それがどういうふうにしたら維持できるかということについて、私どもは健康寿命を日本一にしようとかいうよりも、ただただやはり健康で長生きするのがいいということで、いろいろと試みをしてきたわけですが、既に統計調査はやっていたわけです。そうすると、食事に気をつけるということがすごく大切だと。バランスのいい食事をする。それと軽い運動を継続すること。

それから3つ目があまして、コミュニケーションといいますか、社会参加をしている人は健康寿命が長いですよ。つまり、独居になって、出るのが嫌になって、いつも一人でということになっていると、そういうの方が早く健康を損ねるといふ統計結果が出ておまして、その統計結果を発表していたので、これだということで、健康に関わる厚生労働省が静岡県に厚生労働大臣最優秀賞をくださいました。だからコミュニケーションというのは、こういう専門家を通じて小さな社会参加の場を提供されているんですね。

だけれども、これでも不十分だと発言者3さんはおっしゃる。じゃあ、どうしたらいいか。それは地域の住民の方と民生委員と一緒に協力することだと。いわゆる見守りをみんなで行いましょうと。特に民生委員の先生方というのは、地域の名士が多いし、立派な功績をお持ちの方ですから、そういう方が加わって地域の高齢者の見守りをしていくと、もっと健康で、そして長生きのできる人が増えていくということが統計的に示されているので、民生委員とのつなぎだとか、社会福祉協議会とのつなぎだとか、こうしたところは是非今の御提言を受けて、こういう介護福祉士に従事されている方と連携をしながら、高齢者が元気で明るく長生きできるようにしていきたいと思った次第でございます。こういう方を持って菊川の方は幸運だというふうに思います。いい御提言をいただきました。

発言者4さんは、地域の医療システムといいますか、これに関わる問題で、

御案内のように、静岡県は 10 万人当たりに対するお医者様の数が 47 都道府県の中で 40 位とか 41 位なんです。要するにお医者様が少ないんですよ。どうして少ないんでしょうか。

歴史を見ると、どうも、例えば浜松医大というのがありますが、あれができたのは戦後でしょう。要するに文科省といいますか、厚労省というか、つくってくれないんですね。薩長藩閥が徳川さんの支配下のところをいじめたんじゃないかと言っている人もいるくらいですが、とにかく大学が浜松医大しかないということだったんです。ですから、浜松医大に入学する人は年間 100 人、今は 110 名プラスアルファになりましたけれども、ですから年間 100 人ぐらいしか出てこない。ところが、お隣なんかは 400 人とか 500 人毎年出てくるわけです。ですから、すごく不利な状況なんですね。

そうした中で、お医者様が少なくしてどうしたらいいかと。病院の事務局長をお務めになって目の当たりに新しい研修制度が導入されて、お医者様がどんどん都会の方に出ていくということになっちゃって、それを実感されて、地域の医療を一緒に助けていくための、こちらは育む会、守る会、いろんな名前がありますけれども、それをお立ち上げいただいた。発言者 4 さんは本当に適任の方で、この実態を最もよく知っている方じゃないかと思います。

そして、この問題がこちらだけではなくて、元々は袋井でもやっておられた、お隣の掛川市、またこちらの菊川市でもそういう会があると、一緒にやっぺいこうということで、これはお医者様にとってはすごくありがたいことですね。お医者様を周りから支えるということで、この地域医療を育む会とか、あるいは守る会という存在は、極めてまずは重要だ。

我々の方も放っといっているわけではなくて、どうしたらお医者様を増やせるかということで、医学部をつくるとか医療大学をつくるということを文科省にやっても、全国そういう運動がありますから、これはなかなか難しい。それで考えたんですよ。それじゃハードじゃなくて、バーチャルなメディカルカレッジをつくってみようと。バーチャル・メディカル・カレッジというバーチャルの世界でしょう。

どういうことかといいますと、大学はつくらないんです。奨学金を差上げるんです、医学生に。東大、京大、名古屋大、もちろん浜松医大もそうですが、

全国津々浦々の医科・医療大学に学んでいる方に奨学金を差上げる、6年間。医学部を卒業するのに6年かかります。6年間奨学金を差上げますから、その1.5倍、9年間はこちらで研修して、こちらで医療活動に従事してくださいということです。

そうすると、18、19で大学に入って、6年たつと25、6でしょう。それから9年間ですから34、5まで、25、6から34、5はこちらに来ることになるわけです。バーチャル・メディカル・カレッジがうまくいくかどうか。それは学長をだれにするかということです。学長を誰にしたかという、本庶佑先生です。本庶佑さんの名前は、皆様方ノーベル賞に関心のある方は、今回大隅先生というオートファジーの先生が取られたでしょう。ところが、前評判でトップだった方、それが本庶佑先生です。ガン治療において画期的なpd-1という分子を発見せられて、それが今薬になりまして、ちょっと高い薬ですけれども、これを6カ月続けるとガンが進行しないんですよ。画期的なガン細胞に関わる発見だということで1番だったんですが、残念ながら大隅先生になったわけですが、大隅先生の方がちょっと年が上だということかなと思ったりして、残念でしょうがないんですが、その方は医療界、医学をやっている人にとっては知らない人はいないんです。天皇陛下みたいな人です。その方が静岡県立大学の理事長ですから、要するに経営者ですよ。もう4、5年そうじゃないですか。

それで、この方が学長ですから、天下の学生は本庶先生の話聞けるかということで、それで応募してくるんですよ。最初私が知事になったときには奨学金をあげるというのは、大体年間20名ぐらいだったんですよ。私はよしこれだと思って100人に増やして、今120人です、年間。平成21年から始めていますので、今8年目でしょう。そうすると年間100人で、丸7年たちましたから700人です。そうすると7年たっているということは卒業生が出ているんですよ。つまり、こちらで今働いている。

教育は各大学でやってもらっているんですよ。仮に医学部をつくるようになったら、土地はどうする、何億、何十億、建物を建てるのに百億単位です。それから先生を引き抜いてこなくちゃいけない。その人件費も出さないといけない。それから医療機器というのは日進月歩ですから、このお金がもう、だからあつという間に数百億円かかりますよ。全部全国で教育していただいて、エキスだ

けこちらへいただくという、これがこれから少しずつ静岡県に、少なくとも9年間こちらに御勤務くださる。

あとマッチングというのがあります。例えば、産婦人科が少ないとか、小児科が少ないとか、地域偏差がある、地域の偏りがあるとか、こうしたものを解消していかなくちゃいけない。とりあえず、しかしまずお医者様の量を増やしていくということを私どもはやっております。

こういう方針と、それからこの発言者4さんがやっていらっしゃるような、地域医療を育む会、これを連携していくと、医者不足の問題も、少しずつではあるけれども、解消していくだろうと。

ただし、やっぱり病気にならないことが大事で、そのためには民生委員などの人も一緒に加わっていただいて、なるべく多くの方々が、だからここに来られている人は皆いいんですよ、社会参加ですから、これが大事です。行きたくない、家にいてテレビ見ているということになったら、だんだん出不精になって、早死、健康に障害が早く出てくるということで、さすが御前崎と菊川の皆様方、出てきていただきましてありがとうございます。

これ社会参加、それから食事、それから軽い運動を、無理したら運動じゃない、運動を継続すると。これをやっていきますと、全体として自分自身が長生きすると同時に、それ自体が地域医療の負担を少なくしていくということにもつながるということでもあります。

今、福祉と医療に関わる重要な話をさせていただきました。しかも両方とも積極的に関わっていらっしゃる方のお話で、モデルになるようなお話だったのじゃないかと、そういうふうに拝聴いたしました。ありがとうございました。

【発言者5】

私は肉牛を育てています。ブランドは遠州夢咲牛です。この仕事をやろうと思ったのは、みんながやらないことをやりたかったから。元々動物が好きなのもありましたが、いろいろな仕事を経験し、たどり着いたのが肉牛を育てることでした。初めて楽しいと思える仕事だったので、やりがいを感じています。

でも、始めてみると楽しいことばかりではなく、たくさん苦勞もありました。

男社会の中で女一人、信用・実績・前例がないと言われてたり、話を聞いてもらえないこともたくさんありました。続けてこられたのは、毎日かわいい牛たちが待っていてくれたからです。

これからもっと規模拡大もしていきたいのですが、素牛高騰が続いて厳しい状況です。餌代もすごくかかるので、何か補助があれば助かります。

静岡県の肉牛は、全国でもトップになれるレベルだと思っています。ですがブランド力が足りない、県外の人に知ってもらえていない、もっと県外の人に知ってもらい、ブランド力を高めていけば、観光客も増えると思うし、経済効果もあると思います。

肉牛を育てる人が減っていく中ではありますが、だからこそ生産者を大切に、働きやすい環境をつくっていただきたいと思います。生産者に過度な負担を強いるのではなく、みんながよくなる方法を考えていただきたいです。

【発言者6】

御前崎市から参りました株式会社やまも満寿多園の発言者6と申します。

このような機会に幸運にも恵まれましたことを、本当に感謝申し上げます。私はこの牧之原の一番南、御前崎で言いますと一番北の方になるんですが、そこでお茶の生産から販売までの仕事を行っております。

私の家庭というのは、割と昔というか、本当に明治の初期から茶農家としてやっております、牧之原開拓の一番最初から関わってきた農家でございます。ちょうど私で5代目になりまして、かれこれ150年近くになるわけですけれども、お茶をずっとやってきたという形なんです、御案内のとおり、非常に現在お茶が厳しい状況にあります。

そういった中で、今日は自慢話をしたいというお話をいただいておりますので、1つ自慢話をさせていただきたいと思います。

御存じの方もあろうかと思うんですが、昨年、本当に幸運にも天皇杯という本当にこの上ない名誉な賞を賜ることになりました。これは決して私、あるいはうちの会社がいただいたものというようには思っておりません。本当に県、あるいは地元の市、またここで忘れてはならない地域の私どもに関わった農家の皆さん、こういった方の協力があってこそ、この賞をいただいたというふう

に思っております。

それはどういうことかと申しますと、私は先ほど申し上げたように、お茶の生産家ということで非常に長くやっておるわけですけれども、自園自製という自分の畑のものを自分で生産する、この菊川・御前崎の方は御存じだと思います。そういった中でやっておったんですが、私の代になりまして、何とかうちのお茶は自分で売りたいなということの中で、27歳で起業いたしました。つまり、今で言う六次産業化を、その当時はもちろん六次産業化という言葉はなかったわけですけれども、そういったことを始めました。

ところが、当然農家がお茶の販売をするということは、これはもう当然なかなか簡単にいくわけではございません。そういった中で物を売るといふ本当にそういった部分では非常に苦勞してまいりました。ただ、やはりせっかく自分がつくったものをお客様に、消費者の方にできるだけ近い形でお渡ししたいなという意思のもとで、ずっと頑張ってまいりました。

そういった中で、お客様も1軒、2軒というような形の中で、何とか増えていったわけですけれども、そういった中で、ある機会がございました。東京の私どものお得意様の関係で、アメリカに大きな海苔屋さんが進出する、それに伴ってお茶も一緒に売ってあげるといふようなお話をいただきました。

それは何と今から25年ぐらい前、1991年になります。当然自分はまだ茶商というか、茶商に毛が生えたぐらいの商売を始めたばかりだったものですから、さて、どういうものかということで苦勞いたしました。考えました。ただし、先ほど申し上げたように、自分のお茶を必要としてくれるんだったら、何とかこれは売っていきたい、販売していきたい、それは国内であろうと海外であろうと同じじゃないかということで、思い切ってスタートしました。

御案内のとおり、最近では農産物の輸出、特に静岡県内においてはお茶の輸出ということで、いろんな場面で皆様も耳にすることがあると思います。私の場合には、そういった25年ほど前から始めたということも、今回の受賞の大きな1つになっていることだけは事実です。

また、そういった中で、販売をしていく中で、非常に特に海外で苦勞した点というのは、なかなか国内の基準、つまり農薬基準に合ったものが、そのまま海外で販売できないんです。どういうことかという、静岡県で、あるいは農

協さんあたりで、農薬の今年の暦という、この中にはたくさんの茶農家、お茶の関連の方はわかりだと思んですが、いわゆる防除暦というのが出ます。これはたしかに日本の国には全く問題なく、決められた農薬であるものですから、これをかけることには何ら問題ないわけです。

ところが、これをすべて使う、すべてと言いかたはおかしいですけども、そのとおりに使っていくと、もう 100% と言っていいくらい、特に EU 圏内、またお隣の台湾あたりではアウトになっちゃうんですね。どういうことかということ、つまり日本と海外とはそれだけ農薬の残留基準が違うということです。

こういったものも先ほど申し上げたように、私どもはずっと 25 年前からやっていく中で、一生懸命そういったことは勉強してまいりました。これもうちだけじゃなくて、近くの、私どもに関わっている農家の皆さんの御協力をいただいて、いや、こういう薬をかけちゃったら、検査したら出ちゃったな、駄目だな、けどこの薬かけたら、変な言い方ですけども、検出されなかったよ、じゃこれは意外と早く農薬でも分解しちゃうんだね、こういったことを研究しながらやってまいりました。

今ではおかげさまで自園、今 12 ヘクタールの直営茶園があります。それから農家を含めて約 60 ヘクタールの茶畑を管理しておるわけですけども、正直、今秋冬番も、今日最後で今揉んでおります。そういった中ではございますが、私どもで生産されたお茶は、正直申しましてすべて台湾、もしくは EU、ヨーロッパ、こういったところに通用するお茶になっております。つまりどういうことかということ、そういったことを経験していく中で、世界に通用するお茶作りをしようということが、うちのコンセプトでやってきたということです。

ですから、今言ったそういう地域の人たちを巻き込んだ農業のやり方、あるいは皆さんに先駆けて輸出をしてきたというようなところが評価の大きな形になって、天皇杯という非常に大きなものにつながったのではないかというふうに思っております。

本当に、これも自慢話に聞こえるかもしれませんが、この天皇杯をいただいて何よりもすごかったと思ったのは、1 月の 20 日に両陛下に皇居にて拝謁したことです。これはもう私実は 63 なんです。お見えになったときに、目頭が熱くなって涙が自然にこぼれました。やはりそういったところで、両陛下にねぎ

らの言葉をいただいたり、御説明を5分ぐらいさせていただいたんですが、これが本当に私の生涯、もちろんこういったことはもう二度とないでしょうけれども、本当に自分にとって昨年は最高の人生だったなというふうに思っております。

そういったことで、自慢話が最初になってしまったんですが、お茶を取り巻く環境、これは特に御前崎、それから菊川、ここも本当に東中遠地域ではもうお茶は基幹作物になっています。その中でももちろんメロン、イチゴ、それから最近ではトマト、レタス等々も非常に行われて、恐らく県知事も御存じのとおり、この東中遠地域というのは、静岡でもトップクラスを誇る農業地域じゃないかなと思っています。そういった中で、やはり残念ながら後継者の問題、特にお茶に関しては価格の低迷、なかなか高く売れない、こういった中でやはり苦労というのは、私ども農家が抱えている大きな問題でございます。

ましてや、お茶に目を落としますと、お茶に関しては、非常に立地のいい、全くもう乗用のお茶刈り機がさっと入れるようなところでも、本当に悲しいことに、もう荒れているような畑もちらほら出てきてしまっているのが実情なんです。ですから、こういった畑の今後、私どもがこういった形でこれを管理していくというのは大きな課題の1つではないかなと思っています。

そういった中で、ある農協関係の方とちょっとお話を聞きましたら、菊川地域の方なんです、なかなか自分の畑だけをやっているのは大変だ、ましてや増やすのはもっと大変だ。これには雇用の問題もあります。それから人手の問題、当然家族労働だけではそれ以上できません。そういったところで非常に大変な問題を抱えている中で、荒廃地を数人の人で共同管理していく。

どういうことかという、つまり自分の畑は、耕作でいったら100%、これはもうやりようがない畑だと。だけど荒廃地は、荒廃になりそうな茶畑は、要するに協業化の中で、言い方は悪いんですけども、片手間で作るお茶、これはなぜ片手間で作るお茶ができるかという、御案内のとおり、今ペットボトルの原料需要というのはものすごい多いわけですね。今日使っているお茶というのは、本当にすべてと言っていいほど、ペットボトルの原料になってしまう。

そういった中で、初めから別にペットボトルの原料をねらっているわけではありませんが、やはり100%、今ある限界の、あるいはそんなに余力のない中で、

より以上耕作面積を増やすとなると、今申し上げたように協業化をしつつ、100%のお茶の管理はできないけれども、50~60%、収入も50~60%、ただし手をかけない、言い方は悪いですが、手をかけなくて、まあそこそこの収入があったらペイできるんじゃないかというようなやり方を今後、やはり我々茶農家も中心になって考えなきゃいけないかなというふうに思っております。

また、そういった中で県の方へ、これはお願いしたいなという部分なんです、今申し上げたように、労働力の問題というのは非常に私ども苦勞しています。これはお茶農家だけではございません。特に若い人たち、先ほど申し上げたようにメロン、イチゴ、それから特にトマト、レタスなんていうのは、割と人手が要る仕事になります。

こういった中で、御案内のとおり、1週間ほど前ですか、新聞に載っておったんですが、いわゆる農業特区に海外の労働者がある程度入れていこうという話が、今政府の方で持ち上がっているというような記事を読みました。

私どもここで何をお願いしたいかというと、やはり先ほど申し上げたように、東中遠地域というのは、非常に静岡でもトップクラスの僕は農業地帯だと思っています。そういった中で、まだまだやる気のある農家というのは僕はいっぱいいると思います。ただし、今申し上げたように家族だけでは限界がある。しかし、それ以上にもっと伸ばしたい、あるいは企業的にやりたい、六次産業化したい。ただし、企業でさえなかなか今求人ができないような人手不足のときに、なかなか人を入れていくというのは、農家レベルでも非常に大変なことだと思います。

こういった中で是非、できますれば私どものこの東中遠、特に菊川、御前崎等々を、まず最初の農業特区に名乗りを上げていただいて、そういったこと等ができるだけ法の規制とかいろんな緩和ができるようなシステムに持っていただければ、今言った雇用の問題等々も、ある程度明るい兆しが見えるのではないかと思っております。

それからもう1点、ちょっと時間が長くなりましたけれども、最後に、いわゆるつくったものは、当然これ私がずっと経験してきたことなんですけれども、販売しなきゃいけないわけです。そうすると、なかなかこの販売というのは、我々農家レベルでは本当に大変なことなんです。私も30年以上、この販売とい

うものに苦勞して、未だになかなか売れなくて、さあ新しいお客さんをつかむにはどうしようかなということ、本当に苦勞しているのが実情です。

お茶も実は静岡県は御案内のとおり、800グラム余の消費量がございます。ところが、第2位の鹿児島、3位の三重県、この辺の消費量を見たときに、9番目、10番目なんですね。どういうことかということ、あれだけ静岡に追いつけ追い越せなんて一生懸命やっている鹿児島でさえ、言ったら失礼なんですけれども、全国レベルから言ったら9番目の消費量しかないんです。静岡の恐らく6割ぐらいしかない。ましてや47都道府県で40番以上というところは静岡県の2割、あるいはもう一番最後の消費量はもう1割ちょっとにしかないような消費量しかないんですね、静岡県と比べた場合ですね。

私何を申し上げたいかということ、まだまだ僕はお茶というのは静岡県で800グラム以上飲んでいるんだったら、他県でも僕は飲んでいただけるという可能性があるんじゃないかなというふうに思います。

特にいろんな報道で御案内で、見た方もいらっしゃるかもしれませんが、御前崎では「つゆひかり」というお茶を一生懸命頑張って、これを中心に御前崎茶の販売、宣伝活動をしようということ、一生懸命やっております。

こういった中で、今、実は北海道、全国で40番です。静岡県の21%しか消費量がありません、北海道一人当たり。そういった中で、そこに向かって売ろうと、私ども一生懸命やっています。これもう5年目になると思います。実は来週は御前崎市長もトップセールスで私どもと一緒に札幌の方へ行って宣伝活動、販売活動に携わってくれます。

つまり、今申し上げたように、このお茶が売れない、売れないじゃなくて、実は飲まれてないということをもう一度深く考え直して、是非静岡県、もう本当に県単位で攻め込んでいくぐらいの勢いで、この県だったら絶対攻め込んでいける。恐らくもう県知事さんあたりはいろいろ県知事さんもお知り合いも多いでしょうし、そういった中で特にあんなところの県でとにかくお茶の宣伝に行くから、総掛かりで行くから、何とかお茶をたくさん飲んでくれるようにお願いしますよというような形の中での営業というものを、もう本当に静岡県全体でやっていけば、静岡県のお茶も海外だけじゃなくて、いろんな形の中でまだ増えてくる要素って僕はあるんじゃないかなというふうに思っています。

それこそ、私ども静岡県でお茶をやっている限りでは、まだまだこれ厳しい状況が続くんでしょうけど、やはりそういった意味で販売も同時にやっていかないと、なかなか厳しい状況は変わらないものですから、そういったことも含めて、生産体制、それからあるいは販売体制、こういったものを県とか、私ども知事に任せるだけじゃなくて、自分たちも一緒になってやるつもりでありますので、そういったことで、またぜひ御支援の方をよろしくお願いをしたいと思います。

【川勝知事】

どうも、最後の2人は食材に関わることで、共通しているのはチャレンジ精神じゃないかというふうに思います。発言者5さん、彼女は新聞でも御存じのように、ピンクのつなぎ、ピンクのブーツ、これで彼女のブランドは確立しているんですね。

今日はまた上品ないでたちでいらっしやいまして、やはりお召し物が違うと上品に口先も余り、しかし牛との会話は素晴らしいものがありまして、夢咲牛、実はもうこの数年間、常にうちの牛肉はトップクラスなんですね。ですから、神戸牛だとか、松坂牛だとか、近江牛に全然負けてないんです。けども、そのブランド力というのが定着していない。味は負けないんですけれども、ブランドになってないというそういう問題がございます。

しかしながら、生き物相手ということで、なかなかこの業界に女性が入ってくるというのは難しいと思うんですが、発言者5さん、人がやらないことをやってみるといので、やってこられて、そして牛がかわいくてしょうがないと。元々動物が好きだったというのが原点にあって、そして今牛を飼育されているということですね。

実際、農業高等学校などに行きますと、肉牛というのは大体酪農的にお乳を搾るとか、これ毎日毎日、相手は生き物ですから、朝6時過ぎぐらいにはもう学校に行って乳を搾って、検査をして、そして合格すれば、それを商品にしていくということで、春夏秋冬関係ない、ごまかしがきかないんですね。

24頭をお世話されているわけですから、見上げたものです。しかも、たしか昨年優秀賞か何か取られたんじゃないですか。見上げたものです。しかも、汗

まみれじゃなくて、非常にオシャレというか、格好いいですね。こういう女性を見習ってくれる人がもっといないかなと。

私自身は知事になりまして、こういうごまかしのきかないことをしている青少年こそ、これからの未来を担うということで、農業高校とか、焼津の水産校とか、そういうところの高校の優秀な青少年少女に知事賞を出すと。だから、実業にかかわるそういう青少年を励ますために、そういうところにしか知事賞を出さないということでやっているんですが、しかしそれが実を結んでいるかどうか分かりませんが、こういう発言者5さんみたいな人が出てきて、やっていっちゃうことはすごいですよ。

それからT P P、Trans Pacific Partnership があって、これに加わる加わらないということがずっと問題になって、今でも国会で議論されていますけれども、この品質というのは、これは容易につくれるものではありません。価格を安くするというのはある程度できるかもしれませんが、価格を下げれば売れるとか、しかし品質というのは、これは食べたら分かる、形を見ればわかるということで、しかも安全かどうかということもありまして、そうした意味では、これ私は天下に日本の中でも静岡県産の農産物は通じるし、かつ世界でも勝負できると。

神戸牛だけで世界を席卷したわけでしょう。肉を食べるのは明治以降ですから、それまでは四つ足のものは仏教の教えのために食べないということになっていたわけですね。ニワトリぐらいですよ。あとはイノシシとかシカとか魚からタンパク質をとっていたわけですよ。ところが、もうそれを芸術みたいにして、何千年近く、そういう肉を食っていた人たちが仰天するような、しかも日本はお箸の文化ですから、大体 400 年ぐらい前まで、向こうはナイフしかないですよ、フォークはないですよ。こちらはお箸で食べているから、そのお箸でも、つまり舌でも切れるようにとかいうそういう種類の牛肉をつくりましょうと。ビフテキをナイフ・アンド・フォークで食べられるのもつくりましょうということで、いろいろと苦心をして出てきた肉牛づくりです。それはもう実はトップなんですね、もう芸術品です。芸術のような人間がやっているというわけで。

そういうふうに思ったりしますけれども、是非励まして差し上げて、素牛が

高いそうですが、何とかありませんかね。ともかく、そういう最初の投資がかかりますので、ここはやはり言ってみればベンチャー企業みたいなものですね。最初お金がなくて知恵がある、やる気もあると。そこにきっちりという血液を投入して、独り立ちするところまで助けていくというのがこれからの時代必要じゃないかというふうに思っております。

そうした中で発言者6さんは、今63歳とおっしゃいました。27歳のときに始めたというんですが、36年前にいわゆる六次産業化をやった、そういう名前がないときにやった。しかも、今お茶を売りたいという人は、EUの農薬の残留基準が厳しいので、そこを向こうに働きかけて、それを緩くしてくれとか、あるいは台湾のがきついで、それを緩くしてくれるように言ってくれと、そういうふうに言われる人の方が多いですよ。

それをクリアするにはどうしたらいいかという、ですから甘えないで自分でやって、そしてEUでも台湾でも、元々アメリカでも、世界中の国々に静岡のお茶を売って、そしてその品質は天皇陛下に寿がれるくらい、天皇杯を恐らくこちらの市では初めてじゃないかと思いますが、いただけるくらい品質の高いものをつくって勝負されていると、こういうわけですね。大したものだというふうに思います。

文字通りチャレンジ精神を今も含めて継続して、そして海外では大成功されておりますから、じゃ国内でどうかということで、ちゃんと需要量、これをお調べになって、静岡県はお茶の消費量が日本でトップです。例えば、北海道は5分の1だと。そうするとあそこ550万ぐらい人口がありますから、ともかくそこで売り込んだらどうかと。

今度行かれるそうですが、是非富士山空港を使ってくださいませ。あそこでは毎日飛んでいますから、千歳空港と丘珠空港という市内の中にある空港にも入り込んでいますから、丘珠の方が近いかもしれませんが、札幌に行くには。

しかし、北海道は広うございまして、北の北見から網走からずっとありますから、帯広などというのは静岡県民が開いたところです。依田勉三という人が、あその帯広の大平原を森林地帯だったのをすばらしいガーデンといいますか、畑とかお花畑にしたんですね。だから縁のあるところです。

ですから、何とかこれ商談が成功して、北海道をうちの大消費先としてやれ

ば、次は青森、次は岩手、次は秋田、山形、福島、全部お茶ができませんから。あそこお茶できないんですよ。ですから照葉樹林というか、太陽がさんさんと照らないところではお茶ができません。したがって、東北地方、北海道というのは、そもそもお茶というのは輸入せざるを得ない。ですから消費量も少ないわけですね。そこにちゃんと統計的資料に基づいて売れる可能性がある。

じゃあ、それをどうしたらいいか。例えば健康寿命が延びていますよとか、向こうのアイスクリームが例えば酪農をやっていますから、それと組み合わせたらどうなるか、いろいろ僕はやり方があると思いますけれども、とりあえず消費量の少ないところにターゲットを絞ってやっていこうというのは、これはうちももう1回統計を取り直しまして、どこがターゲットになるか。それから行きやすいところがいいですね。

ですから、飛行機が飛んでいるところがいいというふうに思いますけれども、鹿児島にも飛んでいますからね。鹿児島に静岡茶を持っていっても、必ずしも喜ばれないと思います。鹿児島の人がうちに鹿児島茶とって持ってこられたときには、ということになるでしょう。同じですね。ですから北に商機があるかもしれないというふうにもあります。それから沖縄も飛んでいますから。

それからお茶の最高級の御前崎には「つゆひかり」がありますけれども、一方でペットボトルがはやっているので、それ用のお茶、つまり品質に差別化をして、最高級のお茶を持ちつつ、それができないところのお茶の使い方がもっと積極的にできるように、いいお茶、いいお茶というよりも、それができないようなところでは、それに応じたお茶葉の使い方があるんじゃないかと。二番茶だとか三番茶だとか、そうしたものをどうしたらいいかということを含めて商品の差別化を図っていく、品質は落とさない、最高級のもの。

しかし、そう高い品質でないような形で栽培されているものは、それはそれとしてどこに需要があるかということで、こういう今まで苦労して市場を開いてこられた方ですから、そうしたいろんなお茶畑のお茶の品質に応じた市場があるというふうに思っていると思います。

従来茶商に買ったたかれるような、茶商の方がおられたら申しわけないですけれども、高い値段がつかないといけないというのが、なかなかそれぞれの御事情があつてできないところを、そこは潰さない、その傍らに新しいやり

方でやっていくというのがあっていいと思うんですよ。

つまり、喧嘩をするのではなくて、従来のやり方でやってらっしゃる方もいらっしゃるから、その傍らに新しい静岡のお茶を世界に売って出る、あるいは国内のどこかでやれるところがあると、そこと連携してやってみるというふうにすると、もう一方の方もいろいろと刺激を受けて、いい形になると。喧嘩はしないで、やり方を学ぶということは、うちでもちょっと勉強させていただいて、協力できる場所があれば協力していきたい。

お茶は静岡の言ってみれば命です。山は富士、お茶は静岡日本一ですから、しかもこの健康寿命を支えている機能性ということにおいて、これは科学的に証明されているので、これは確実に飲まれてしかるべきものだというところでございます。

それから、もう一度戻りますけれども、やはり農薬の残留基準ですね、これをどちらに合わせるかということですね。ちなみに今はお肉とお茶でございましたけれども、例えば今オリンピックが4年後にやってくると、そうするとオリンピックで使える建物の材、これは国際認証を持っているか、日本で認証を持っているような材でしか使っちゃいけないということになっているんですよ。F S Cというこれはヨーロッパの基準、日本ではS G E Cというのがあります。こうした認証を持っているものしか使えない。

ただし、すべての材を持つ必要はありません。いわゆるちょっとしたことに使うようなものもあってもいいと思うんですけども、ただそういう世界認証あるいは国内認証というものを持ってないと売れないという場合があるんですね。こうしたときに、そうしたものを受け入れて、それに応じた形で工夫すると。そうすると元々いいので、ちょっとした工夫で先ほどおっしゃったように世界各地に、何か国ぐらい行っていらっしゃるんですか。

【発言者6】

今は30カ国弱ぐらいです。27, 8カ国。

【川勝知事】

ちょっと信じられないような話ですが、20~30の国を相手にお茶を売られて

いる人がいるんですね。それはほかの静岡県のお茶栽培者もやればできるはずですね。こういうモデルは、発言者5さんもそうですけれども、大事に育てるといっておかしいですけれども、一緒に協力して、これを広めていくというふうにしたいものだと痛感した次第でございます。いろいろと御提起いただきましてありがとうございます。

【発言者1】

トップバッターということで緊張したままお話を始めまして、言い足りないことたくさんありました。皆さん私たちの活動、先ほどオーナー制度をやっていると、棚田のオーナー制度ですね。県外からも大勢人がいらっしゃるというお話をしましたが、これってどうして集まるか、皆さん分かります？

実は、私たち千框の棚田倶楽部は、非常に大きな素晴らしいホームページがあるんですね。今はホームページ、そしてSNSを使った情報発信ってすごく大事です。この中で私たちの「棚田いこうよ.net」、このホームページ、実はホームページの制作会社が無料でつくってくださって、維持管理費も全く無料で、そのまま使わせていただいています。多分全国の棚田保全活動をする中で一番アクセス数を持っていると思います。一番多いときは1日1,700アクセスがありました。平均しても300を下回ることはほとんどないくらいのホームページを持っています。

この情報発信力が棚田のオーナーを集め、そしてマスコミの皆さんにも注目を浴びて、先週の土曜日に行われました稲刈りでは静岡テレビ、SBS、そして静岡朝日テレビということで、3社がテレビカメラを持ち込みました。午後には静岡朝日テレビの女性アナウンサー、本当にきれいなお嬢さんが2人、そして男のアナウンサーが来まして、稲刈りをやるというようなこともありました。

そしてなぜ都会の皆さんがこんな倉沢の田舎に来て楽しめるか。これって棚田の景観、そしてこの優れた生態系にあるんですね。この生態系って、例えば今稲刈りですと、どろんこの中で稲を刈ります。でもその傍らには、今ですとツリガネニンジン、ワレモコウ、そしてときどき咲いているナンバンギセルとか、こういった植物がたくさん咲いているんです。そういったものにすごく都

会の方は癒されるんですね。

私たちの活動というのは、大勢の人を集め、そして棚田の保全活動をこれからも進めていくというのもあるんですけども、情報発信をしていく。そしてこの棚田の優れた景観と、そして生態系を守る。その生態系を守る中で、絶対に必要なのが、これから大人になる子供たち、その子どもたちに私たちは一生懸命伝えていきたいこと、この生態系の素晴らしさというのをもう少し時間があればカエルのお話をしていきたいんです。

カエルのお話をさせていただくと、多分とても時間内では済みませんので、今度田植えの時期に千榎に皆さんいらしてください。すごくきれいなカエルの声が聞こえます。シュレーゲルアオガエルという外国の名前がついていますが、れっきとした在来種の日本固有種のカエルですけども、この声が大変大きく聞こえます。人間にとって心地いいと言われている音域で鳴くこのシュレーゲルアオガエルの声、これを聞くだけでももう癒されます。そして12月にはニホンアカガエル、静岡県では絶滅危惧種ですけども、こんなニホンアカガエルももう本当なら冬眠していて当たり前、そのカエルたちが千榎の棚田ではときどき鳴くんですね。

こういった生態系を私たち一生懸命守りながら、そして大学生との協働をしっかりと進めながら、これから将来に向けてまだまだ千榎の棚田を増やしていく、そして未来に残していく景観というのを私たちはずっと守っていきたいと思っています。

【川勝知事】

言われるとおりですね。情報発信をしっかりするということが大切だということではありますが、1日最低でも300件、多い日には1,000件以上のアクセスがあるというのは、こうした発信力を持たないと人が分からないという、人にいかに分かっていただくかということにも努力をして、そして分かっていただくに来ていただける。

そして売らんかな、宣伝せんかなというのではなくて、やはり生態系といいますか、これを大事にしていると。ワレモコウ、この赤いお花が咲いて、そうしたのを見て歌を詠む人も出てくるでしょう。

ですからその昔、日本で一番最初に天皇陛下が勅撰でつくられた歌集というのがあります、『古今集』というやつですね。『万葉集』じゃないんですよ、『古今集』。そこに「仮名序」というのがあるんです。そこに「やまとの歌は人の心を種として」とあるんですが、そういついて、そして「花に鳴くうぐいす、川にすむかわづ、いずれか歌をよまざりける」と、生きとし生けるもの、皆歌を詠んでいると。

ですから今気持ちがいいとおっしゃいました。自然の声をあたかも音楽や歌のように聞くという心持ちは 1,000 年以上の歴史があつて、だから我々の中に息づいているものだと思うんですね。それを楽しめますよとおっしゃっておられます。我々の身の回りからカエルのゲロゲロ鳴く声が聞こえなくなって久しいのじゃないでしょうか。

ですから、そうした本来この国に、これはもう秋津島（あきつしま）ですから、トンボが秋津ですよ、トンボが秋になると青空、秋空の中で舞っていたと、そういう国ですよ。やっぱりこれは取り戻さないといけない。菊川とか御前崎とか、こういう人々の手が入っているところ、大地に、こうしたところで人が来ると、野生の自然と違って、いわば庭なんですね。ガーデンなわけです。あるいは園芸とっていいでしょうかね、農業というよりも。

そういう庭づくりのようなことをされておられて、そこに生物も一緒にすんでいると。それが歌みたいに聞こえると。月が出ていると、また田んぼにそれが映ったりする。そうしたことへの我々の憧れみたいなものがあるはずですよ。それは恐らく世界中の人々が楽しめるものじゃないかと思うんですね。ですから発言者 1 さんの中に生きているのは、こうした我々日本人の中にずっと受け継がれてきたそういう文化、これを継承していきたいというのがあるんじゃないかと思います。

最近の言葉では生態系というふうに言われますが、これはもうユネスコが茶草場もそうですけれども、いいお茶をつくるために、結果的には生態系を豊かにして、秋の七草だとか、そうしたものが自然に残っていたという、すごいねということになったわけですね。一発で決まったわけですよ。1 回見に来られて、即決まったわけですよ、すごいということで。ですから見る人を見ると、我々のレベルはすごく高い。

それを実際に証明しているのが発言者6さんのところじゃないかと思うんですよ。一旦売って出て、向こうの基準に、相手の土俵に乗らないと勝負にならないので、相手の土俵をちゃんとして、俺のところの土俵に乗りに来いというのじゃなくて、相手の土俵に乗って勝負してみると、すごいなということで、もう20~30カ国で販売できるという、こういう可能性を持っているんじゃないでしょうか。

私は初めからTPPなんかやっても負けないと思っていましたよ。価格で勝負するんじゃない、品質で人々は高くても安全で美味しいものを買うような人がいると。そこと勝負すればいいと思っておりました。そうしたことも関連して、今のお話を拝聴したわけですがありがとうございました。

【傍聴者1】

細かい質問で申し訳ありませんが、先ほどの発言者6の方からお茶の消費のことについてお話があったんですけれども、我々も今研究しているんですが、知事は御存じだと思うんですけれども、学校教育で5日のうちの4日間がお米になりました、米飯に。でも変わらないのは、その横にある牛乳なんですね。やっぱ日本の食文化を生かすため、または日本文化を世界に売るためにも、子どもたちにお米を食べるときはお茶だよという習慣を是非つけていただきたいなと思います。

牛乳を全面否定するものではありません。菊川市でも試行的に10時のお休みに牛乳を飲んでいただくというやり方をやっておりますので、日本の食文化を守るために、是非ごはんにはお茶ということ調べていただいて、実現できたらいいなと思いますので、よろしくお願いします。

【川勝知事】

どうもありがとうございます。給食は戦後、いわゆる脱脂粉乳の牛乳から始まりまして、タンパク質をとるので、確実に子どもにわたるよということとで始まったんですね。ところが長くパン食だったわけですが、やはりご飯ということで、ご飯ほどおいしいものはないということで、それが主食になっている恐らく唯一の国ではないかと思います。おかずと主食というのは日本だけで

すからね。そういうご飯にお茶だったわけですね。そのお茶をどうして普通に出さないのか。これよろしくない。

牛乳とお茶をどのように両立させるか。簡単です。牛乳は、最近では配達が少ないようですが、朝配達してくるでしょう、絞りたての牛乳を。だから、学校にも午前中に配達されている、当然。ですから早いところは1時限目の前に、遅いところでも2時限目、3時限目あたりで配達されているんですよ。配達されてすぐ飲めばいい。中にはご飯を食べてこない子がいます。そうすると4時限目の授業が例えば体育だとすると、力が出ないですよ。それから集中力がなくなります。ですから、牛乳一杯飲むだけで十分なんです。

焼き魚に牛乳というのはおかしいですよ。ですから両立はできると。今の牛乳は脱脂粉乳じゃありませんから、おいしい牛乳であります。

これを私は条例でやりたいと思っております、実際700ぐらいの学校があるんですが、そのうち実際お茶を飲ませているのが200に満たないんですよ。いろんな理由で牛乳一本で済まされているんです。これは違う。私はお茶を静岡県、特に菊川、あるいは御前崎はその名産地でございますので、やっている学校もあるんですけれども、全県下そういうふうにしてやっていただきたい。

今条例をつくっております。ただ強制できませんね、これは。そういうふうになるようお願いしたいということでございますので、是非まずは子どもたちからということで。どうもありがとうございました。

【傍聴者2】

まず発言者1さんのようなSNSでの発信とか、全くありません。発言者6さんのように実行力、決断力、販売力も全くありません。ところが、うちの自宅のすぐ前の本家の茶畑が2反くらいですけれども、この3月で返されることになりました。乗用の茶刈り機が入れるんですが、賃料が何もなくても返されちゃいます。これどうしようか。本家ともども私も困っております。

それで私は古い人間、時代遅れの人間ですから、60年前の暮らしの方が好きなんです。その茶畑は放っておけば竹林になってしまいます。どうやって維持しようか。アイデアだけしかありません。全くの素人です。60年前の手摘み

とかいいませんが、茶刈り機でやってみたら、茶刈りはさみですね。それを誰にやってもらうか。お年寄りを中心にした近所の方が、もし家に閉じこもっていたお年寄りとか、そうですね、遊びのつもりで、昔の自分がやっていた茶の作業をやってくれないかどうか。もうお金儲け全然要りません、竹林になればそれだけで十分、生産したお茶は参加してくれた人がみんな持っていつてくれればいい、固定資産税だけ入れればいいと思いますね。

それで、お茶は遊びと文化で茶畑を維持していこうじゃないかと思いますが、こんなど素人の考えが通じるでしょうか。プロに教えていただきたいと思いません。

【川勝知事】

どうもありがとうございます。遊びと文化なんて素晴らしいじゃないですか。ですからそれ何とか、地域といいますか、そういう老人の方たちの集まりで、そういうことができないものかと。ただし、固定資産税分は必要ですから、ただし茶畑を何らかの形で維持する。そのときに儲かる、儲からないとか、茶価が低迷しているとか、そういう話とは別個に、この茶畑の景観を残していこうと。遊びながら、楽しみながら、運動にもなるし、その茶葉をいただけるということであれば、経済的に成り立つかなというふうにも思いますので、非常にユニークな、しかも、さすがに年齢を重ねている人でないと、なかなかそういうことが言えない。

ちなみにうちは76歳まで壮年です。77歳になってちょっと自分を労っていたきまして初老ですね。80になりますと中老、88、米寿でこれは大いなる長老になっていくと。76までは健康寿命ですから、そこまでは壮年ですが、ともかく、人は無駄に年は取らない。判断力というのは、体力が劣り、記憶力が悪くなっても、判断力は私は成熟していくと思います。いろんなことを経験して、その経験値の中で欲がそがれちゃって、どういうふうにすると、この地域に恩返しができるかとか、御先祖様に対して申し訳ないというようなことを思ってこの世におさらばしなくて済むかとか、いろんなことを考えて、そして一緒に楽しめるようなことがあればということで、自分の考えを皆さんに共有していただければ、遊びと文化なんていうのは実に素晴らしいことで、これ桃源郷の

世界ですね。

ですから、そういうことがもしできるなら、是非そういうお仲間が周りについて、そのうち若い子たちも一緒に来たりして、お孫さん連れてきたりして、それがおもしろかったりすると、もっともっとその遊びと文化になって、茶畑が実は遊園地みたいになってくると。

ちなみに、お茶を濟州島とか朝鮮半島の南に移植されました。そういう茶畑というのは、手入れをするから綺麗でしょう。濟州島という朝鮮半島の南の島では、デートコースですから、茶畑が。結婚したり、エンジェルスポット、そうになっているんですよ。それくらい実は綺麗なところなんですね、ちょっと視点を変えると。

濟州島に行かれることがありましたならば、そのお茶畑がデートコース、しかもいわゆる防霜ファンってあるじゃないですか。あれも全く同じですよ。ただし、それは防霜ファンなんですけれども、同時にシェアした形につくり変えられているんです。パブリックガーデンになっているわけです。そこはデートコースになっているんですよ。だから、文化とか遊びというものと結びつかないわけがないということでもあると思いましたね。いいお話だったと思います。感心いたしました。

【発言者6】

本当に素晴らしい、今日はここに来て最高に良かったなというお話をお伺いしました。「茶畑お助け隊」を65歳以上の方で是非結成していただいて、そういった形の中での事業、事業という言い方になっちゃうと、ちょっとまた違うかもしれませんが、是非午前中はグランドゴルフ、午後はお茶畑の健康を兼ねた、運動を兼ねた管理だよというような形の中の是非「お助け隊」を結成していただければ、本当に私どもこれから先、お茶をやっていく人間にとっても非常にありがたいと思えるお話ですし、何も本当に今お話に出ている若い方だけじゃないなということを感じさせていただきました。本当に勉強になりました。ありがとうございました。